

第 33 回 武蔵野文学賞「高校生部門」 俳句部門

選考委員 井上弘美、三浦一朗、堀切克洋

【一句単独の部】

【最優秀賞】

万緑の羽田空港侵蝕す 矢野麟太郎

◆「羽田空港」は世界で五番目に利用客の多い空港。国内線の利用者は平均で一日十八万人余り、国際線はおよそ四万七千人だという。そんな、国内はもとより、世界に向かって開かれている空の玄関口を題材にした点に、俳句形式に挑む若々しい意欲を感じた。しかも、季語は「万緑」で、「空港」とは対照的。高度に人工的に整備、管理されている「空港」が、「万緑」に侵蝕されているという捉え方に作者の認識の深さがうかがえる。もちろん、俳句にメッセージ性は不要で、この句も「侵蝕す」と写生に基づいて表現している。「羽田空港」の周辺の木々が、緑の葉を広げて、じわじわと空港を「侵蝕」しているのである。そんな光景を、作者は飛び立つ飛行機の窓から眺めたのかもしれない。「万緑」の圧倒的な生命力を、引き締まった韻律にのせて捉えた作品で、最優秀賞にふさわしい。(井上弘美)

◆季語は「万緑」で夏(三夏)。夏の盛りに草木が青々と茂り、生命力にあふれる様を言う。その「万緑」に、「羽田空港」という巨大な人工物を取り合わせる意外性がまずあり、さらに、その「羽田空港」を侵蝕するほどにという形で、生い茂る草木の生命力を巧みに表現し得ている。類句として蕪村の句「不二ひとつづみ残して若葉かな」を想起したが、富士山の壮大さと拮抗するほどの蕪村の「若葉」の旺盛な生命力に対して、巨大で硬質な建造物をも飲み込んでしまいそうな「万緑」の生命力には、「侵蝕」という表現も相まって何か得体の知れない不気味さを感じられ、ただの類句にとどまらないオリジナリティを認められる。(三浦一朗)

◆歳時記を引けば必ず書いてあるように、「万緑」は王安石の漢詩(「万緑叢中紅一点、動人春色 不須多」)が出典とされ、中村草田男の「万緑の中や吾子の齒生え初むる」の句によって新季語となった。一般に日照時間が長くなる夏の自然は生命力に満ち溢れているが、そのなかでもダイナミックな季語が「万緑」である。ところが、だ。羽田は埋立地であり、沖合である。視界を確保するため、高い木々もない。ゆえに、空撮のような俯瞰する視点——つまり「高い木々」ではなく、空港敷地内の緑化された部分を「万緑」として見立てたと考えてもよいかもしれない。正木ゆう子の〈水の地球すこしはなれて春の月〉のように、写生的でありながら人間の通常目線ではないところが、季語に日常を超えダイナミズムを与えているのだろう。(堀切克洋)

【優秀賞】

店員の双子と気付く良夜かな 帯谷到子

「わたし」の双子が働いている先でばったり遭遇したとも読めなくはないが、家族であればバイト先は知っているだろうから、双子が同じ店で働いているというふうにも読むのがよいだろうか（雑貨屋のような小売店ならば、一卵性の双子の兄弟、あるいは姉妹が経営しているということはある）。折しも「満月」の明るい夜に入った店で、ドッペルゲンガーを見てしまったような不思議な感覚が立ち上がってくる。単に月を愛でているわけではない、上質なユーモアが漂う一句。（堀切克洋）

精霊馬風に揺れつつひとり待つ 鈴木里彩

この句の「精霊馬」は胡瓜で作った盆の供え物ではなく、「真菰の馬」のことだろう。これは「七夕馬」とも呼んで、七夕の日に笹に吊したり飾ったりする。ただし、この馬は盆の供え物としても用いられ、その場合は精霊の乗り物となる。「精霊馬」という季語は無いが、こう詠まないと「七夕馬」と区別がつかない。中七に「風に揺れつつ」とあるのは、真菰や藁で作った「馬」が吊してあるからだ。古い習俗を生かした句で、地方色が感じられる。「風に揺れ」という表現はややありきたりだが、「馬」が乗せるべき「精霊」を待っている姿として、しみじみとした趣がある。（井上弘美）

蝉しぐれ止みて残れる石の熱 柳英茉

季語は「蝉しぐれ」で晩夏。言うまでもなく、山中で一斉に鳴き出す蝉の声を時雨に見立てて言う。晩夏とは言えまだ暑さの残る頃、強い日差しに熱せられた石の上に降り注ぐように蝉しぐれが響く。時雨に降られたのであれば熱した石も冷えそうなものだが、蝉しぐれが降り注いだこの石は、その鳴き声が一旦止んだ後も熱を持ったままである。その気づきに含まれる少しのおかしみと共に、夏の暑さが余韻となって「石の熱」に感じられるところがこの句の良さであろう。（三浦一朗）

【佳作】

炎天や骨の輪郭だけが我 高岡奈央

季語は「炎天」で晩夏。近年の夏の異常な暑さには、比喻表現を越えて本当に体が溶けてしまいそうな気持ちになる。炎天下、だらだらと汗が流れ続け、いつか自分の体が全て溶け出してしまうのではないかと感じられた瞬間を、「骨の輪郭だけが我」と、句跨がりの表現で一息に言い切ってつかまえたところが、観察が確かで勢いもあってよい。(三浦一朗)

木枯らしに母の膳待つ灯のともり 松本煌史郎

季語は「木枯らし」で初冬。木を吹き枯らす、冬のはじめの冷たい強風を言う。その木枯らしが吹き、家々に灯がともる夕暮れ時と言え、寒さに加えて寂しさも感じられる。その寒さや寂しさの中で暖かい「母の膳」を待つ。「灯のともり」が「母の膳」の温もりとよく響き合っていて、冬の寒い日の小さな幸せを描いて好感が持てる。(三浦一朗)

蝉しぐれ神父の説教訛りおり 宮内菜摘

季語は「蝉しぐれ」で晩夏。まだ暑さの残る中、恐らくは上の空でぼんやりと聞いているのであろう神父の説教よりも、外から響く蝉しぐれの方に作中の〈私〉の意識は向いている。本来ならありがたいはずの神父の説教だが、その内容ではなく、言葉の訛りしか〈私〉の意識には残らない。そのように不真面目な〈私〉の姿を通じて、けだるくなるほどの夏の暑さを描いているところが面白い。(三浦一朗)

恋をしたときの瞬きするスピカ 土屋沙音

「スピカ」は一等星でとても明るい。麦の穂が実る「麦秋」の時期に光って見えるこの星は、豊穰の女神デメテルをモデルとした「おとめ座」の一部となっている。「スピカ」を季語として収録している句は寡聞にして知らないが、季節感が裏打ちされていること、そして「恋」（あるいは乙女）という題にて詠まれた（主題のある）無季句として十分に読みうることから、とても印象深い一句だった。(堀切克洋)

遊び紙母と見し日の秋桜 西森結海

「遊び紙」は書物の巻頭、巻末の見返し紙と本文との間に入れる白紙。そんな、ひらりと挟まれた白い「遊び紙」に、かつて母と見た「秋桜」をふと思い出したのだ。感性の柔らかい作品で、「遊び紙」の効果で風に揺らぐ「秋桜」が見え、母を恋う揺らぐような心情が伝わる。(井上弘美)

木洩れ日に波紋ひとつや鴛鴦涼し 中村紗綾

季語は「涼し」で夏（三夏）。おしどりの夫婦仲の良さは周知のことだが、その仲睦まじさを、身を寄り添わせて水面に浮かぶ番いの鳥の「波紋」が一つになっていることで捉えたの

が秀逸。ただし、「鴛鴦」は夏は主に山間にいるが、里に出てくる秋以降の繁殖期に美しく羽を色づかせた姿が印象的なので、冬の季語（三冬）として詠まれる。そのため、「鴛鴦」と「涼し」の組み合わせがうまくいっていないのが惜しまれる。（三浦一朗）

雷の合間廊下を松葉杖 吉田百花

「松葉杖」を使っているのだから、傘はさせない。「雷」が鳴り出して、今にも雨が降りそうなのだ。次の雷が鳴るまでに、渡り廊下に辿りつこうと全速力で進むが、思うほどスピードは出ない。こんな場面が思い浮かぶ作品で、臨場感がある。（井上弘美）

しっとりとまつ毛の光る孕み鹿 峯田陽仁

季語は「孕み鹿」で春（三春）。五月から七月ごろの出産前の鹿を言う。子を身ごもっている雌鹿に艶やかな恋の雰囲気を見て取り、その艶やかさを「しっとりと」光るまつ毛で捉えた着眼が優れている。オノマトペを安易に用いると凡庸な句になりがちだが、この句では「しっとりと」という形容がよく働いていて、他に代えが効かない表現になっている。（三浦一朗）

犬走る風より早くひまわりへ 横張柚葉

標識のような一本の向日葵なのか、それとも群れ咲いている向日葵畑なのか。ともかくも犬が文字通り、疾風怒濤の勢いで駆けてゆく。世界をまなざしている「わたし」と、風が吹き抜ける道を走る「犬」、そしてその先にある「ひまわり」。その三つの存在が一直線につながっていく。描写的でありながら、その奥にあるまなざしの独自性がいい。（堀切克洋）

照り返すアスファルトまで拍手くる 清水美櫻

盛夏の路上ライブだろう。「拍手くる」とあるので、歌っているのは作者。歌い手も観客も強烈な暑さの中で音楽を楽しんでいる。その熱気を「アスファルトまで拍手くる」と捉えたのが秀抜。ただし、「照り返し」は季語ではない。今回、「照り返し」を季語として詠んだ句が複数句あったので、必ず季語を確認するように。（井上弘美）

風薫る海から丘へ告ぐ手紙 辻村莉央

五月、六月くらいの新緑の風である。鷹羽狩行の〈海からの風山からの風薫る〉に見られるように、「海」という存在は、それ自体が独特の匂いをもっているから「風薫る」とはいわば対照的である。そのため、手紙を送っている側ではなく、受け取っている側に視点があると読むのがよいだろう。低い海から小高い丘へ届いた一通の手紙。風薫る丘の上で、遠くに見える海の潮風が手紙からほのかに立ち上がってくるようだ。（堀切克洋）

白夜の湖ボートの影がまだ眠る 竹内ライナス

日本では体験できない「白夜」だが、十分に想像ができる景である。「眠る」という擬人化そのものは常套句ではあるが、まだ人々が眠っているような朝の時間帯であると思うと、単純なレトリックというわけではないだろう。湖の映しだす「ボートの影」は、現実と非現実のあわいのような場所なのだ。(堀切克洋)

銀閣の淡きモノトーン秋驟雨 船山智成

「銀閣寺」といえば、国宝観音堂。これを「秋驟雨」の中で眺めての作品で、むしろ雨によって風景が落ち着いている。枯淡という言葉が似合いそうな渋い風景を、「淡きモノトーン」と表現した点が斬新だと思った。(井上弘美)

青き空プールに映る私たち 佐藤詩子

掲句は「私たち」という自己参照的な視点を写實的に描いていることから、〈いま・ここ〉のかけがえのなさに伴う情感が感じられる。プールに入る前、何人もがプールサイドにいて、青空と人影が美しく映り込む水が見える。失われゆく青春の一時性、あるいは傷つきやすさが、水面という非現実には託されているようだ。(堀切克洋)

【複数句の部】

【優秀賞】

「エヂソン」 福田匠翔

◆身近な題材を様々な角度から切り取った作品で、読後が爽やか。冒頭の〈駆けてくる人へかなかなしぐれかな〉は遠くから走ってくる人を、蝸の声とともに迎えるような手法で新鮮。続く第二句は「いちじくの中」が「壊れてゐるやうな」という捉え方そのものが個性的。落ちている「椿」と「犬の鼻」だけで構成した第六句も、大胆な省略によって場面が明瞭。第七句は表題句で、「エヂソン」の表記とともに題材がレトロな味わいを醸している。この題材を生かしているのは「桜葉降る」という晩春の季語で、花盛りの季節の終わった倦怠感と彩りが、かつて蓄音機から聞こえた不明瞭な音に、人々が心躍らせた時代が思われる。〈何を掃くともなく掃いて春惜しむ〉は、韻律によって惜春の情そのものを捉え、最後の〈浮くやうに沈んでゐたり水中花〉も、「水中花」の特徴を平明に捉えて既視感がない。作品の最後に、作者の存在が見えるという事だろう。

今度に向けて一言添えると、「浮寝鳥」「日向ぼこ」の句は狙いがよくわからなかった。また、十句をまとめるのに秋から夏へと四季を巡らせたことで、やや作品としてのまとまりに欠けた点が惜しいと思った。もう少し作品の数を増やして、全体として統一感のある作品になれば申し分なかった。(井上弘美)

◆十句の中によい句が多かった。第五句「おはやうが先か明けましてが先か」は、俳句らしいとぼけたおかしみがあってよい。第三句「オーボエかクラリネットか浮寝鳥」は、音色がよく似たオーボエとクラリネットを聞き分けようとして悩んでいるのか、水面に浮かんだまま寝ている鳥をぼんやりと眺めながら、第三者からすればどちらでも構わないようなことで頭を悩ませる〈私〉の姿がやはりおかしみを持つ。

一方で、第十句「浮くやうに沈んでゐたり水中花」は、「水中花」の独特な浮遊感を見事に捉えて秀逸である。第六句「落ちてゐる椿の花へ犬の鼻」もそうだが、作者の観察する眼の確かさを感じさせる。また、第八句「何を掃くともなく掃いて春惜しむ」は、過ぎゆく春を惜しんでも留めるすべがないもどかしさを、「何を掃くともなく掃く」という所在なげな〈私〉の姿を描くことで表現していて味わい深い。

作品名の由来となる第7句「桜葉降るエヂソンの蓄音機」も悪くないが、後半が置き換わった類想の句が多そうで、そこは少し残念である。また、やはり十句では数が少なく、連作としての展開や作品世界の広がりには欠けてしまう。力のある作者だと思うので、今後もよい句を揃えつつ、より多くの句からなる連作に取り組んでもらいたい。(三浦一朗)

◆現実を輪郭づけていくというよりは、意図的にぼかしていくような発想が強い作品。〈いちじくの中の壊れてゐるやうな〉は、「壊れてゐる」というやや大袈裟な言葉によって、いちじくが無機質な存在となるまで熟れていることを描きとった佳作。「おはやうが先か明けましてが先か」は、歳時記に収録されている季語が含まれているわけではないが、新年であることは一目瞭然であることは言わずもがな、「明けまして」という省略によって、人間の瞬間的な認識のありようを掬い取っている独自の視点があり、驚かされた。〈オーボエかクラリネットか浮寝鳥〉は、遠くに金管楽器の練習が聞こえてくる冬の公園を思った。わたしも判別できないと思うが、水鳥が心地よく寝ている暖かな日差しに、不可視の金管楽器の輝きと冷たさが重なるようだ。

一方で、言葉の機知性が作者の言葉の進化を止めてしまうような危うさも感じた。「何を掃くともなく掃いて」「浮くやうに沈んでゐたり」というようなレトリックは、俳句によく見られるものではあるが、「俳句らしく」詠むことが目的化してしまうと、作品としての深みを感じられなくなってしまう。逆説的に聞こえるかもしれないが、「いい句」を作ろうとあまり思いすぎないほうがいい。

〈学問のすすむ机や朴の花〉は、たまたま私が俳句評を書いている「秋草」十一月号でも犬星入氏によって取り上げられていたが、「机」と「朴」の漢字の類似が、この句の機知性を増幅させていて、気負わない遊び心のあるところがいい。ただし、俳句賞に作品として出した句を同時期の結社誌の投句に使うのは、あまり関心をしない。一句一句を、誰にどう届けるかということまで含めて、ぜひ「書く」ことの意味を考える機会にしてほしい。(堀切克洋)

【複数の部全体評】

「花火になりたかった」

作品にストーリー性はあるものの、一句一句が散文的で、季語が十分生きていないのが残念だった。また五、七、五の一字空け表記も気になった。

「三日間の熱」

感性の冴えのようなものが感じられた。文化祭というテーマも無理が無く、〈後夜祭の炎へ投げ込む台本〉〈床に落葉段ボールの星ひとつ〉に注目したが、「後夜祭」の句が無季になってしまったのが残念だった。

「夏の旅路」

季節を「夏」に絞ったことで作品が緊密。〈馬揺れて青田の香り懐かしき〉のような句が詠めるのが強み。ただし「青春の味」のようなパターン化した表現に頼らないほうがいい。

「種と空の環」

俳句的にまとまった句より、〈滲みゆくすりガラス越し夕焼けや〉のような、実感のある作品をもっと見せて欲しかった。季節も絞って、密度の濃い作品にするほうが良い。

「旅」

テーマが明瞭で、一句一句丁寧に詠んでいる。〈筥の石仏の文字隠したる〉〈オートバイ押して進めり夏の雲〉〈蝉時雨建築現場休み中〉など場面がよく見える。十七音字のリズムを大切に、こういう句を揃えて再挑戦して欲しい。

「知らぬ」

句末（下五）に工夫があって、作品全体を上手に繋いでいる。冒頭と掉尾の句が良いと思ったが、「ゆるゆる」「そよそよ」「しくしく」のようなオノマトペが上五に置かれているのは単調。

（井上弘美）